まち ひと しごと

Vol.30

北海道新聞　倶知安支局
支局長　内本（うちもと）　智子（ともこ）　さん

共に暮らし共に考え 同じ目線で伝えていきたい

北海道新聞倶知安支局長の内本智子さんは、関西で生まれ育った。学生時代はテニスに打ち込み、幼いころの将来の夢はプロテニス選手だったという彼女は、高校時代に全国大会でも好成績を収めた経験を持つ。しかしそこで自身のテニス選手としての限界を知り、卒業後は大学で新聞学・ジャーナリズムを学び北海道新聞社に入社した。

最初の配属は、学生時代の実績もあってかスポーツ関連の記事を担当する運動部へ。当時は日本中が長野五輪で盛り上がる中、北海道出身選手への取材なども担当したという。その後は報道本部や東京、また道内の各支社での勤務を経る中で、フランスへ短期の語学留学も経験した。

新聞記者の仕事の魅力は「さまざまな地域を知り、人と出会えること」と「社会の変化の最先端に触れられること」と話す内本さんは、昨年の秋に倶知安支局へ配属となる。

「赴任した初日、駅から倶知安支局までを徒歩で向かう中、立ち並ぶあか抜けた雰囲気のお店や、そこで働く人、そこを訪れる人たちの若さと活気を強く感じました」

北海道内の他の市町村でも、なかなか見ることのない、若い人たちが溢れる町の姿に驚いたという。

この町で迎えた初めての冬。雪の多さにも驚いたが、それ以上に、慣れない除雪作業に苦労する自分を見かねて、近所の人が手を貸してくれたりと、倶知安の人たちの温かさや優しさに触れた冬だったと話す。

「倶知安の人は穏やかで優しい人柄の印象が強いです。転勤してきたばかりの私を温かくこの町に迎え入れてくれたことには、本当に感謝しています」

自身を優しく受け入れてくれた倶知安町。しかしながら、国内だけでなく世界中から注目されているこの町には、たくさんの外国人が暮らしており、それらの外国人と住民が接する機会は少ないのではないかと話す。

「私を温かく迎え入れてくださった倶知安の皆さんなら、たとえ国籍が違っても、何かきっかけさえあれば、簡単に距離を縮めることができるのではないでしょうか」

外国人が多く暮らすこの町で、国籍などの異なる人々が、互いの違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、共に生きていくことは、倶知安町がより良い町となるために必要なことだ。

「外から来たという意味では私も外国人も同じ。この町に暮らすことで、町民の皆さんと思いや考えを共有しながら、新聞記者として同じ目線で伝えていきたいです」

※まち ひと しごとは不定期連載です